

政十年五月二十三日江戸に生まれ、幼より家學を受け、詩を善くし、書畫に巧みであつた。昇年に及び古筆了伴に嫁したが、後離別して尼となり、元貞の金澤に移つた時に墮ひ、安政三年四月五日歿した。享年五十九。立像寺に葬つた。その著に蘭香詩稿數卷がある。

オホタリゴウ 大足郷 珠洲郡の古郷名。

和名抄には訓がないが、オホタリと訓むのであらう。又和名抄一本に大豆に作るものもあるが非である。一説に今の大豆であらうといひ、又太多の誤字で、直郷であらうと説くものもあるが詳かでない。

オホダワダニ 大田和谷 能美郡杖の南方溪谷で、その水杖川に注ぐ。

オホチアヤヨシ 大地文資 通稱文作・順之助・順左衛門・縫殿左衛門。字は伯政・拙靜、惡齋と號した。天明五年養父千吉の遺知三の一を受け、寛政三年本知百七十石に復し、九年大小將前田齊廣御抱守となつてから諸職に歴任し、文政元年百石を加へ、三年又百石を加へて、食祿三百七十石に陞つた。文資傍ら詩書を好んで市河寛齋・大窪詩佛・福原五岳と唱酬し、谷文晁の門人となつて書を能くし、清人童可亨の風に倣つて最も墨蘭に巧であつた。文政十年十二月三日五十一歳にて歿。

オホチチカトモ 大地近知 通稱彦右衛門。父眞純純甫齋の時初めて前田綱紀に仕へた。貞享元年近知その祿を襲いで百石を領し、次いで室鳩巢の妹を娶つて妻とし、享保十年六月十七日江戸に歿した。享年六十六。

オホチマサトキ 大地昌言 字は士愈、一字は行甫。通稱新八郎。東川・通稱・齋齋・奚

言ふのは、昌言の父彦右衛門近知が鳩巢の妹を娶つて生んだ子であつたからである。初め書寫御用の職を奉じて毎十五人扶持を受けたが、享保十年父の歿後その遺知百石を襲ぎ、十三年には御書物奉行となり、寛延元年には俸七十石を加へて改作奉行に轉じた。幼にして神悟、十二三歳の時既に善く詩を作り、後に六經を研精して義理を明晰にし、大學の微旨を剖析して、その説く所往々鳩巢の右に出で、遂に前田宗辰・重熙の侍讀に任ぜられた。寶曆三年六十一歳を以て歿。門人印牧直道・加藤惟實等その詩文を輯めて案疑齋遺稿三卷とした。

オホチマサナリ 大地昌業 通稱茂右衛門・助七。昌言の養子。寶曆三年遺知百七十石を襲ぎ、御馬廻に班し、御書物奉行・改作奉行に歴任し、天明三年九月二十日五十二歳を以て歿した。雜題詩百篇の著がある。

オホチマサユキ 大地昌之 通稱大藏。一諱愛蹊。縫殿左衛門文資の子。文政五年九月學校の誦師を命ぜられ、十一年七月祿三百七十石を襲いで組外に列し、次いで大小將組に遷り、又加州郡奉行となり、天保十年十二月廿八日四十四歳を以て歿した。

オホチヨウマツ 大帳松 江沼郡山代にあつた。江沼志稿に、大帳松は女松で、日廻り八尺、眞直で、一の枝まで十間許、枝振り傘の如しとある。大帳松は御帳松の誤で、藩の簿冊に登録せられてゐる意であらう。

オホチヨウヤマ 大長山 能美郡風風谷の南方越前の國境に在り、古くは應頂山とも書く。高さ一六七二米。山頂石安山岩。

凶名は現に痕跡を存する大津入江の瀾大にして、この部落が浪海の港津であつたによるといふ。能登名跡志に「此村昔は徳田佐渡守といひし領主ありし比、諸事運上して船着なる故大津の名あり。佐渡守城跡は、少し山手則徳田村(羽咋郡)といふに在り。又大津村に大野氏山廻役あり」とある。大津から羽咋郡安部屋港に至る間は、その距離八軒二に過ぎぬから、享保中こゝに運河を開鑿せんとするの計畫があり、明治六年石川縣令内田政風も亦之に着手したが、經費二百數十萬圓を要するとのことで實行に至らなかつた。

オホツ 大津 羽咋郡堀松庄に屬する部落。オホツアキヒロ 大津寛廣 得田文書貞應五年七月の着到狀に、能登國得田次郎左衛門入道素章の代官大津次郎太郎寛廣が凶徒退治の爲桃井兵部大輔に屬して大和に發向したとある。大津寛廣は鹿島郡大津村に居住した人であらう。

オホツカ 大塚 羽咋郡羽咋神社の境内にある前方後圓墳で、大正六年九月石衛則命の御墓と治定したものである。オホツカイキ 大塚壹岐 初めて前田利常に仕へ、三千石を領し、御馬廻頭・御旗奉行に任ぜられた。子孫相繼いで藩に仕へる。

オホツカタテハキ 大塚帶刀 前田利常に仕へ、大坂再役に惣構で首一つを獲、三百石を領した。子孫相繼いで藩に仕へる。オホツガハ 大津川 鹿島郡徳田領かうちから流出で、大津の領海に落ちる。流程五軒五許。

オホツカヒ 大使 前田綱紀の初世から、大使といひ、それより少領を運搬するものの中使又は中荷物といふた。後に大使は止んで、京都中使及び江戸中荷物に合同した。オホツカヤゴダユウ 大塚彌五太夫 元祿八年父庄太夫遺知の中百五十石を襲ぎ、定檢地奉行・改作奉行に歴任し、享保十年五十石を加へ、寛保三年七十六歳を以て歿した。

オホツカヤマ 大塚山 鳳至郡瀨上部落の東南にある山。高さ四八二米。

オホツキ 大槻 鹿島郡一背庄に屬する部落。オホツキウチテイ 大槻氏邸 廢藩前までは、金谷門の前なる路傍に古松四株あつて、それが大槻朝元邸前の松であつたといはれて居た。古老の傳説に、文政五年藩校がこの地に移轉したが、その以前は大槻屋敷と稱して、泉水栗山の跡があり、荊棘生ひ茂つて漸く細道があるのみであつたといふ。かの古松は廢藩の際伐り去られた。

オホツキケンブンロク 大槻見聞録 二册。一名金城殿秘録。前田吉徳の寵臣大槻朝元生涯のことを記し、序に明和午の水無月洛東の隱者之を書すとある。オホツキシチロザエモン 大槻七郎左衛門七左衛門の子。大槻朝元の長兄。正徳四年父に代つて御持弓足輕となり、次いで小頭に進み、享保九年九月御細工人に轉じて四十俵を受け、十年五月六組御歩五十俵となり、十九年十二月新知百三十石を受けて新番を命ぜられ、寛保三年二月百石を加へ組外に列し、寛延元年二月歿した。

オホツキスケカタ 大槻祐方 初名を吟爾